

第八章 特急イリ・ライナー

イリが凱旋したからというわけではないだろうが、ちょうどソシアの侵攻を受けたウクライナー共和国の首都キーフ行きの特急イリ・ライナーがイリ駅に入線してきた。イリは周りからの猛反対を押し切って乗車することにした。

イリが地球に戻ってきたことが知れ渡ると世界中がその動向を注目する。ノロと宇宙に飛び出したがその後消息がまったく分からなかったからだ。ともあれ本当にあのイリなのかという素朴な疑問を含めソシアのウクライナーへの軍事侵攻とあいまって注目を集めた。最も驚いたのはソシアのプチレンコン大統領だった。

当初独裁者プチレンコンにとってイリよりノロが怖かった。そのノロがイリと宇宙に向かったのはラッキー以外の何物でもなかった。しかし、イリだけが戻ってきたとなると違った意味で問題があった。少し変わったところがあっても平和主義者であるノロはともかくイリは違う。つまり女王、絶対権力者なのだ。

イリと一緒に地球に戻ってきた者がいないかどうか慎重に探索する。どうやって地球に戻ったのかも調べる。もし宇宙戦艦で戻ってきたのなら脅威となる。いくら軍事大国のソシアでも宇宙戦艦には歯が立たない。現に中華明国が痛い目にあつた。

しかし、弱気な発言はできない。もし特急イリ・ライナーがウクライナ共和国に行けば安全はもちろんのこと女王とはいえイリの命は保証しないと通告した。あまり意味がない牽制だが精一杯の虚勢を張るのが独裁者の仕事だ。その一方、軍に対しては特急イリ・ライナーに手を出すと命令した。

*

「すごく乗り心地がいい」

イリは満足そうに車窓を眺める。

「日本の技術援助で製造した純国産です」

イリは乗車前にイリ・ライナーの外装を観て驚いた。淡いピンクの桜が花吹雪となったデザインだったからだ。

「速く走らなくていいわ。花見をするようにじっくりと車窓を楽しみたい。特に砂漠地帯を走るときは徐行して遊牧民に流れるサクラを眺めさせてあげましょう」

試運転のせいかイリ・ライナーは特急にしてはゆっくりと走行するし停車駅も結構多い。しかし、イリは久しぶりに見るタクラマカン湖畔のトワイライトを楽しむ。

「この湖がすべての始まり」

イリの気持ちを察したのか列車が速度を落とす。今のイリには心地よいスピードだ。やがて停車する。すると周りが少しざわめく。

「姫様、いや女王様はどこじゃ！」

聞き覚えのある声がイリに届く。

「爺や？」

以前この声を聞くとうんざりしたが今は懐かしい。

「イリ様！ よくぞご無事で」

「それは私のセリフ。頭をぶち抜かれたのに大丈夫だったのでね」

「頭の一つや二つ失っても爺やはびくともしません」

イリは長老の手を取ると大笑いする。

「ノロが言ってたとおり爺やは永遠の命を持っているのね」

「どうせ持つのなら若いときに持ちたかったのう。イリ様のように」

長老は手に持つ風呂敷包みが無骨に突き出す。

「駅弁じゃ」

「駅弁？ 高速鉄道網の駅にそんなもの売ってるの？」

「これはイリライナー国内だけのサービス。我が国の特急は非力なのでウク・ライナーやユーロ・ライナーのように時速五百キロの超高速運転ができません。せいぜい三百キロが限度。しかも主要な駅には必ず停車する。そこで乗客を飽きさせないために駅弁を……」

「ちよつと待って。爺やは今何をしてるの？」

「先ほど停車した駅の理事長じゃ」

「理事長？」

「またの名を駅長という」

「再就職したのね。良かった！」

長老がうれしそうにお辞儀をする。

「あとでこの駅弁の感想を聞かせていただきたい」

イリが駅弁を開く。

「おいしそう！」

「とりあえず召し上がってください」

「これは寿司ね」

イリが鉄火巻きをほおばる。そして丸いモノを掴む。

「それは少々熱いのでフーフーしてからお召し上がりください」

「これは！ 爺や……じゃなかった。駅長、この駅弁の名前は？」

「たこ焼きと寿司のコラボ駅弁」

イリはたこ焼きを喉に詰めて気絶する。

*

長老はイリの隣に座ってあれこれ説明する。

「国境を越えました」

「ウクライナーまで『〇〇スタン』という国々が続くわね」

「長老が咳払いすると返答する。

「例外がございます」

「？」

「キリギリス共和国です」

「そうそう。思い出したわ。国民は歌うのが好きでちっとも働かないと大統領が嘆いていたわ」

「それは一昔前のこと。ソシアに侵攻されたら大変だと国内で対立していたアリ一族と和解して経済発展しました。一応ソシアには従順な姿勢を取っていますが、音楽を含め芸術活動が活発な国になりました」

「フーン。どの国も芸術で勝負したらいいのにね」

「そのとおりでございます。ところで本当にイリ様はお一人で地球に戻られたのですか」

「そうよ」

「地球は再びノロ殿の力を必要とするかも知れません」

「当てにしてはダメよ。気ままだし両生類と親戚になりたいようだし」

「親戚に？」

「その次は爬虫類と結婚するらしいの」

第八章 特急イリ・ライナー

「結婚！」

今度は長老が倒れる。イリ・ライナーが威勢のいい汽笛を鳴らして速度を上げる。